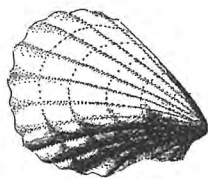


# 明治晩年の頃の同志社生活

## 大塚節治



本誌三十六号の拙文で述べたように私は明治三十六年四月同志社普通学校一年に入学し二学期末に退学して食寮生活に入ったが再び志を立て、翌三十七年の九月に元のクラスに再入学をした。友人U君は私と同時に退学のまま同志社には帰えらなかった。その八ヵ月間に私は新しい人生経験をしたのであるが同志社には関係がないから一切省いて明治三十七年九月から筆を染めることとする。

新島先生の墓所の門を入ると右手に垣根に沿うて松本五平君、高木庄太郎君の墓と並んで大西留吉君の墓がある。今は大西留吉が何者であるか知る人は極めて少ないと思うが彼を囲んでの友人仲間の物語りは同志社教育の芳しい香りと思うがゆえにこれから彼を中心とした友人たちの友情を画いてみたいと思う。

大西君は明治十七年二月、伊勢山田に生れ十二歳のとき松坂の商店に丁稚奉公に出て、十六歳のとき京都西陣の機屋に奉公をした。その頃彼は同志社の近辺を通る毎に寄宿舎で少青年が楽しく勉強している様をみて向学の志を燃やした。この頃から彼は渋沢

栄一を理想の人となし、自分の名前も本名留吉を通称富一として仕事に励んだ。主人は彼の人物を見込んで養子にせんとしたが彼は自分の志の達成がはばまれることを恐れて、店を辞し、十八歳のとき大阪に転じ、二年間或る商店に奉公し、二十歳のとき同志社普通学校二年に入学した。明治三十七年四月のことである。私は同年九月元のクラスに再入学をして彼と同級になった。座席はアルファベット順であつたから彼と隣り同志となった。このときは彼はその人柄と年輩のゆえに級長をしていた。私はその頃二条城の北側、松屋町、竹屋町上る処に下宿していたが、三十八年(明治)一月同志社西寮十二寮に入寮し三月二十九日に北寮前寮に移った。この頃、彼と私とはかなり親しくなっていた。三月十二日の聖日に彼と同級生の小林大五郎君と私と三人が日野真澄先生から洗礼を受けて同志社教会に入会した。三人は各々のスポンサーに当る指導者を異にしていた。大西君は誰に導かれたか判然しない。小林君は同郷の先輩、当時専門学校三年の小原静一君という人に導かれたと思う。私は上級の及川八楼君に導かれて決意

したのである。われら三人の受洗者と及川、小原の二先輩と五人は一緒に撮影している。

この頃同級生は約五〇名位であつたと思う。卒業のときは四〇名となり、現存者は一〇名となつた。その内には前早大総長阿部賢一君や元国際基督教大学総長現在名誉総長湯浅八郎君、元千葉農事試験場長農博中江利郎君などがある。少人数であつたから自ら親しくなつた。それに加えて、毎金曜日夜の祈禱会に於ては勸話を通して各自の思想や意見を發表して各の人柄が明かとなり、更に金曜に屢々行なわれた演説会も同様な結果をもたらし、各意氣投合する者が各グループをなすに至つた。それに毎土曜日ハイキングはそれを一層促進した。

ここでわれらのサークルに入つてきた人たちにつき簡単な紹介をしておくのが適當であらう。

先ず入信の手引きをしてくれた及川八楼君を紹介する。彼は私より二つ上の明治十八年の生れであつたと思う。岩手県遠野の人で、その弁舌、文才、頓知、情熱、俠氣等々誠に人を引着する人物であつた。同志社普通学校専門学校卒業後、国民新聞社に入り、後米國に渡り数年の後歸國して海老名総長の秘書を暫時つとめたことがある。後毎日新聞社に入り、大正十二年関東大震災の直後救護班員として横浜で奔走中、過労のため斃れた。惜しむべき人物であつた。彼の弟は普通学校卒業後、一東・東大と秀才コースを進み経済学博士の学位を得た。私とは親密ななかであつたが、いまは通信がたえている。

次ぎに私が出会つた人物は同級松浦忠三郎君である。彼は純粹

の京都子であり、温厚であり、慎み深く情に厚い紳士型の青年であつた。彼の宅は新町五条上るところであつたが在学中の大部分は入寮していた。家には中風で臥床中の父君、これを看護する母堂及び姉さんがあつた。彼は三十八年（明治）四月頃には北寮前寮にいたと思う。後に記すように大西君が病氣になつてからその死に至るまで心と財を以て彼を助け勵ました者の第一人者であつた。同志社普通学校卒業後早稲田に一年ばかり居たと思う。後中井商店に入り長く上海に住み、終戦後歸國して物資窮乏の時代、二十二年八月廿一日茨城県鹿島郡高松村の平井、鹿島療養所で心臓衰弱のため永眠した。未亡人は今は鎌倉の娘さんの嫁先きに寄寓している。最近、彼の同僚であつた人から彼の永眠當時の模様をきいたがそれは彼の性格と同志社人の風格を示すものであるから記して読者と共に彼を追憶したい。當時は国民一般が豆かすや野草で飢えた凌ぐ有様であつたから菓類も不自由で、凡ての病人に良薬を与えることが困難であつた。松浦はこの事情を考え、自分は一切の高貴藥を斷り、他の患者に廻す様医師に願ひ、死に至るまでこれを貰いたということである。彼の永眠は大悟徹底靜かなる大往生であつた。医師たちもこんな立派な人に接したことがないというほどに深い感銘を受けたそうである。

われらのサークルに紀州串本の人で神田林太郎君という学生がいた。彼は寡黙でヌーヴォーというか茫洋というか東洋流の大人の風格があり、同志社卒業後、串本で郵便局長や書籍店を経営し、神林さんと云う愛称で人々から敬愛された。昭和四十二年五月二十三日に逝いた。目下その令孫が同大四回生として在学中で

ある。彼は大西君が休学中、そのアルバイト彰栄館の鐘つきを代行したと記憶する。

大西君を労働や金銭で助けはしなかったが精神的に彼を助けた友人二三を紹介する。其内には足利緝君がいた。彼と私とは同志社以前の友であり、今日も尚、元気で毎月彰栄会で顔を合せている。彼と私とは広島県立師範学校附属講習部という、小学校教師の速成学校で三十五年（明治）四月から翌三十六年三月まで同級生であり、同じ下宿で寝食を共にした間柄である。私が京都に来てから間もなく、後を追うように京都に來り、同志社普通学校に入学し三十七年（明治）十二月十一日、私より三ヵ月早く受洗した。普通学校、専門学校を卒業し、大阪毎日新聞社に入り、五十年近く中国に派遣記者として過した。戦後大阪の国連本部に奉職していたが今は茨木県に悠々自適している。広島県加茂郡西条の旧家の出である。無邪気で開放的で人々から親しまれる。彼が中国から持ち帰った調度の一部が同志社総長室の飾りとなっている。

同じ仲間であれより一級上の明治四十年組に森松貞次郎君という晩学の学生がいた。彼は伊予の産で苦学力行の典型的人物であった。常に南米に雄飛するといっていたので友人仲間では南米翁と呼んでいた。誰であったか「南米が同志社を出るその折は十歳（ととせ）を三つ重ねぬるかな」といってからかっていた。彼は後に寮長をつとめたが長年牛乳配達をしており大西を財的に助けたり、アルバイトを代行することはできなかったが、精神的支援者の一人であった。同志社専門学校卒業直後某実業家の抱持ち

をして外遊した。大正の初め頃米國に留学しコロンビア大学で勉学したと思う。よくユニオン神学校の私の室に遊びに來た。帰朝後、実業家として漸次地盤を築いていたが、伊予、梅津寺の海水浴場で遊泳中脳出血のため斃れた。四十歳を少し越えていたかと思う。惜しい人物であった。

われらのクラスで同じく伊予の産で大野喜志松君という漢（おとこ）がいた。彼は芸術家肌の男でよく淨瑠璃を口ずさんでいた。普通学校卒業後三高、東大と進み、国文学を専攻したと思う。東大卒業鉄道省に入り官吏になったが惜しいかな夭折した。彼と私とは二、三年間共に西寮食堂の給仕をしていたから特に親しかった。彼もまたアルバイト学生であったから、大西を金や労働で助けることはできなかったが、精神的に彼を支えた一人である。彼が専門の文学に進んでいれば、その領域で名をなしたと思う。惜しいことであった。

さて大西の話に入るまえに明治三十八年前半に於ける学生運動の一、二と社会的出来事の二、三を記すこととする。

当時学生運動といえば新聞紙の発行壁新聞演説会などによって学校当局や校風を批判する位のもので今日のような政治的で花々しいものではなかった。三十八年（明治）の春の新学期に普通校三年の者が「健闘」という学生新聞を発行した。それは校内の作興を目的としたもので、私も「学校当局に訴ふ」「同志社魂を振起せよ」等を投稿している。学校の許可なく無断で発行したことは問題とされなかったが、編集兼発行人の年齢が問題となった。彼は十八歳の未成年者で法的にその資格がなかった。創刊号発行

のとき彼は社長兼校長（下村孝太郎博士）の代理、日野真澄先生に呼び出されて注意を受けた。そこで第二号からは同級の先輩者柿田君に名義変更をした。柿田君のことは同志社時報三十六号の拙文で紹介したように鼻下にひげを蓄えた先輩者であったから問題はなかった。健闘は二号まで出たが、それ以後は立消えになつたと思う。健闘の中心人物は慷慨悲憤型の青年で、健闘の発行だけではなく、次ぎに述べるような壁新聞を貼つたり、先生方の眼にあまつたようである。第二号が出たとき教頭波多野先生に呼び出されて注意され、日野先生からは二度目の注意を受けた。余計なことをせず、真面目に勉強せよと訓戒であつたようだ。

一学期も半ば過ぎた六月の初め、この慷慨居士は北寮前寮の入口の廊下の壁に「北寮諸君に訴ふ」という檄文を掲げた。彼は寮の空気がだらしなないと考えたようである。ところがこれは寮生の反感を買い、彼は生意気だということで非難的となつた。寮長があり、上級先輩が沢山いるなかで新参の下級生が忠言めいた檄文をかかげるとは高慢不遜の至りであるに違いない。

これについては周再賜君のことを書かねばならぬ。周君は同志社最初の台湾留学生として普通学校に入学した明治四十二年組の学生であつた。稍稍介なところがあつたが清潔な人物であつた。

普通学校、神学校を卒業して米国留学の後、母校神学校の助教授の時、辞して前橋共愛女学校の校長に迎えられ、三十七歳から七十七歳まで四十年間女子教育に尽し、岡崎文化振興賞（六十二歳）藍綬褒章（六十六歳）勲四等瑞宝章（七十八歳）等を受けた。昭和四十四年十二月二日に歿した。未亡人千代氏は前橋に住んでい

る。明治三十八年の十二月初め慷慨居士は金曜日の祈禱会に出席し続いて演説会に出席して校風の弛緩を攻撃したらしい。同輩、先輩を刺激する苦言を吐いたとみえる。先きの檄文のこともあり、周君は彼のためを思い次ぎの忠告文を彼の室に投込んだ。

何々君足下

余ハ感激ノ余、此一紙ヲ君ニ呈ス。君ト余トハ別ニ深モ交誼アルニ非ズ。簡單ナル同窓一面識ニ過ギザルナル。サント信ズル処、志ノアルトコロ決シテ二轍ナラザルヲ知ル。故ニ互ニ相注意スルハ最モ適切ナル事トス。今夜君ノ直言無私ハ確カニ余ノ營テ見ザル所、真ニ千万言ノ褒辞モ換ヘ難キコトハコノ刺ノ如キ数語忠告ニアルナリ。余ハ医憾ナリ。君ガ言ヲ味ヒコハ実ニ我一大警鐘ニシテ衷心ヨリ感謝スル次第ナリ。余モ聊カ忠告致シ度キハ御存知ノ如ク忠言ハ耳ニ逆フモノナレバ金石ノ言モ時宜ニ適セザレバ従ウニ怨ヲ買ヒ、禍ヲ招クモノナリ。幸ニ君モ自重セラレンコトヲ。

明治三十八年十二月一日夜

周 拜

この忠告文は半紙一枚に毛筆を以て認めたもので、彼は宝物の如く大事に保存し、今日も時々出しては味読しているときく。

七月七日第一期の終了式があり、飯塚先生を訪問した。先生は私も慷慨家の仲間と思われたらしく沈潜勉学に励むよう訓戒を受けた。



明治三十八年（一九〇五年）といえは日露戦争の二年目で正月二日は難攻不落といわれた旅順の要塞が陥落し、三月十日には奉天の大会戦がわが軍の大勝に帰し、五月二十七日には日本海々戦があり、バルチック艦隊が全滅し、我國の勝利は決定的となった。この頃から米国大統領テオドール・ルーズベルトの斡旋により媾和の運びとなり、九月に入り、ポーツマスに於て媾和条約が締結された。ところが大勝を得た我國は賠償金一文もとらず、不利な条約であるというので、小村全権は勿論、桂内閣は国民の総攻撃に会った。九月五日条約調印の日、日比谷公園に於ける国民の反対集会は暴動化し交番が多く焼打に会い、桂内閣を支持した唯一の新聞であった国民新聞社も焼打の災難を蒙った。

然るにこの国運を培った大戦争も飛行機のない時代で戦争は外地で行なわれ、国内は平穩で我々学生は無事学窓生活を過ごすことができた。戦勝の度毎には祝賀の催しがあり、日本海の戦のときは五月三十日の夜提灯行列が行なわれた。三条のYMCAでは戦勝祝賀会があり宣教師オールチン氏が「本野大将風呼べば……」の歌を独唱したことが記憶にある。

夏休に入って、各寮の残留学生は皆西寮に移った。私は七月八日西寮十二寮に移った。

話が前後するが二年生の三学期中、市内に於ける出来事の一つを記さねばならない。三月八日ハリス博士の歓迎会が市内諸団体の共催で、市の議事堂（現在市庁舎のあるところ）で開かれた。ハリス博士（Meriman Colbert Harris 1846-1921）は夫人と共に明治六年（一八七三年）に来日し、函館に伝道し札幌農学校の

学生内村鑑三、新渡戸稻造に授洗したメソジスト監督教会の宣教師であった。函館の遺愛女学校はその夫人の創立したものである。後、明治九年東京に移り、東京英和女学校に教えた。明治十九年帰京し、西部沿岸の日本人に伝道し、明治三十七年に再び来日し、日本朝鮮の宣教監督の職にあった。当時ハリス博士が何人であるかを知らず歓迎演説会に出席したのであるが私が感心したのはハリス博士ではなく歓迎の辞を述べた一人、京都帝国大学総長木下広次氏であった。何辺も眼鏡をかけたりはずしたりして原稿を見ながらの話であった。演説の内容が何であったかは記して居らず、演説そのものは上手とは云い難いと思った。しかしその態度の重々しさが極めて印象的であった。服装は羽織袴であった。「君子重からずんば威あらず」（論語学而篇）とはこおいう人のことであるかと感心した。帝大の総長というものはこおいう者かとも思った。そうして自分もこんな人になり度いと思った。

さて私は夏休みに入り前述のように西寮十二寮に移った。これより先き私は六月一日から牛乳配達をやめ西寮の食堂給仕を始めた。当時食堂は東西各一ずつあった。学生は何れに行っても差支なかった。給仕仲間は一級上の遠山茂雄君と同級生の大野喜志松君と金子節造君の四人であったと思う。一日三度食事時間の仕事は激しい労働であったが、食費が免除されたので生活が安定した。夏休中は開店休業で仕事はなかつたで食事をしたわけである。休中の事で記し度いことは大西君と大阪まで演説をききに行ったことである。

七月十八日大阪中島公会堂で原田助（当時神戸教会牧師後の同

志社々々長総長）海老名弾正（当時本郷教会牧師後同志社総長）両先生の大講演会があった。大西君と私は前日の夕方、伏見から川船に乗って大阪に向った。安治川口についたのは夜の十一時頃であった。その晩は船場の待合所の二階に泊り翌日昼中は市内の見物に費し夜中島の公会堂行って両先生の講演をきいた。大西君は先きに記したように二年間大阪にいたので大阪の地理には通じていた。先ず天王寺に行きその近所で朝食をとった。車飯というもので車引が食べる食事であった。代金は四銭であった。それから同級生の山本吉之助君を訪ね、共に道頓堀、高津神社千日前、心斎橋、築港と廻り、再び道頓堀にかえり昼飯をとった。途中は電車や巡航船を利用したが大部分は歩いた。午後三、四時頃中島公園に行き、ベンチで休み、銭湯に行き、公会堂に入った。講演は八時頃から始まり十時過ぎに及んだ。原田先生の題は「東洋文明の根本義」というので印度視察談が主であった。海老名先生の題は「わが来世観」であった。私の日記には原田先生については「ながく上手なり」と印象を記し、海老名先生については「学者の如くならず権威をもてる者の如し」と評している。会が終わってから大西君と私は市外に出て河内平野から（今の門真、寝屋川）淀川沿いを歩いた。丁度満月の頃で蛙の声をききながら、半睡半醒の様で歩き、八幡で夜があけた。寮についたのは正午まえであった。この頃大西君の病気は彼も友人も気がつかなかった。彼の病気がわかったのは秋になってからである。

夏休みが終わって帰省中の学生も皆帰寮し、残留学生も西寮から各自、自らの寮に帰った。

学校は下村社長がが兼務していられた各学校の校長を辞し、新たに専任の校長として丹羽清次郎先生がみえた。その歓迎会が九月二十二日午後六時半から公会堂で催され、続いて西寮食堂で歓迎会食があった。

十月二十日（金）午後一時～二時の波多野先生の時間であった。先生は教頭事務のために忙がしく、約十五分ばかり遅れて教室に現れた。学生たちは大声で色々と批評しながら待っていた。先生はドアの外で、暫く立ぎきをしていたらしく、教室に入ってすさまじい勢で学生を叱った。級長の大西は起立し涙を以て一同に代り陳謝した。その光景は今、尚、私の眼底に残っている。先生方の印象を記すと面白いと思うが紙面がないから割愛する。唯一つだけ波多野先生についてのわれら仲間の評を記述しよう。谷岡勝美君は先生をモーセに比して寮誌に長文の評論をのせた。これはなかなかの美文であった。同君は四十四年組の逸足で一高に入学したが一年足らずでつまらぬと云って同志社専門学校へ転校した、後大阪税関長などを務めたが、その才能を延しきれないで、早世したことは惜しいことであった。及川八楼君は先生を佐久間象山に擬していた。同志社紛擾で、同志社を去ってからは西南学院に移り、あそこで同志社在職中にもまた大きな感化を残した先生である。

十月二十八日（土）大西、杉浦両君と私は土曜の休日を用いて愛宕山に登った。清滝から登り高尾に下り一日の遠足を楽しんだが、その日は悲劇の前兆が大西の上にさしかかった日であった。彼は登山中屢々遅れがちとなり、躰に故障があることに気づい

た。下山後、医師の診断を受け、肺炎カタルと解った。それでも日常の勉強とアルバイトには差支なかったので用心しながら三十八年を無事に終ることができた。併し彼の蒙った精神的打撃はひどかったと思う。結核に対する恐怖は今日とは比較にならぬものであった。

学校では前述のように九月に丹羽校長を迎えたほか十一月二日には上賀茂神社の芝生で運動会があり三日には天長節の拜賀式が行なわれた。十一月九日には雄弁を以て世界的に知られていた米国のブライアン氏が来て公会堂で講演をした。通訳には日野真澄先生が当った。講演の内容は記していないがさすがに偉いという印象を受けている。引続き堀貞一牧師の満州視察談があった。先生はブライマンに前座をつとめさしめて後々までも自慢の種にしていた。十一月二十一日には午後公会堂で植村正久牧師の講演があった。話の要旨は全々つかめなかった。十一月二十九日の創立記念日には通常の如く課業があった。創立三十周年の祝賀式は十二月八日(金)午前九時から十一時半まで公会堂で行なわれ、宮川経輝牧師と横井時雄元社長の講演があり、盛会であった。学生は色々な催物をなしたが、わが三年級は模擬店と新島先生の逸品展示をなした。十二月十八日より学期試験があり、二十三日第二学期終了式があった。二十四日一人若王子山に上り、先生の墓前で祈った。三十一日は自室にて冥想感謝の内に三十八年を送った。

明けて明治三十九年となった。三月末まで学校には特に記すべきことはなかった。一月二十七日阿部賢一君など多数の寮生が岩

倉に兎狩りにゆき兎二頭をを獲てかえり、同夜西寮食堂で寮生一同兎汁の御馳走に与った。二月九日には本多庸一氏の来講があった。この頃、毎年新島先生の命日一月二十三日に近い金曜日の祈禱会では八重刀自の先生臨終前後のお話があった。茶目学生はその口真似をして人々を笑わせていた。若王子山上の祈禱会はまだなかったと思う。多分明治四十年頃から始ったのではないか。

大西の病氣は漸次に進んで四年生の第三学期が終わるのを待たず二月の下旬には休学して郷里に病を養うこととなった。大西、松浦、私の三人は二月二十三日の午後京都をたち笠置まで汽車でゆき、笠置で一泊、翌二十四日は笠置の史跡を尋ね、月ヶ瀬に下り、梅花を賞するには少し早過ぎたが、谿谷の景色を楽しみ島原に出て、そこから汽車で伊賀の上野にゆき、そこで一泊し、翌朝城趾などを見物して駅近くの芝生で共に彼の快復を祈り、正午の汽車で立つ彼を見送って松浦と私とは帰京した。その旅費は松浦君が出してくれた。

三月三十日には卒業式があった。私たちは四年級に進んだ。四月十六日に始業式があり、私は組長に選ばれた。五月十八日には唐崎でボートレースがあり、われのクラスが優勝した。

六月十八日には原田助、江原素六両氏の講演があった。江原氏は元旗本武士で基督教信者であって、政治、教育家として知られていた。七月二日から学期試験があり同六日第一学期終了式と神学校の卒業式があった。

夏休になって松浦と私は志摩波切に大西を見舞うた。彼は波切に下宿し、志摩の国一円を安物の懸軸を売って歩き生活の資とし

て養生していた。私ら二人は七月十日津までゆき、津で一泊翌日大西君の実兄山下氏を訪問、外宮、内宮を参拜、更に二見浦を見物鳥羽にゆき三河館に一泊、翌十二日には志摩の国を徒歩縦断して波切についた。大西の下宿にゆき三ヵ月振りの再会をよろこび且つ彼の元気な姿をみてよろこんだ。ここで一週間を過ごしたが、その間に度々大王ヶ崎の高台に立ち太平洋の大波が巨巖をかむ壯観をながめたり、神明浦の真珠養殖場を見学した。波切湾を中廻一尾を求め刺身にして食べたが、過食のため私は腹をこわして困った。松浦を残して七月十七日私は一人三十噸ばかりの小さな汽船に乗り津に向って、船に弱い私はひどく酔い、苦しんだが、津に上陸して船よいはけろりと忘れたが腹のために町医者に行き薬を買って、津近在の香良洲にゆき松坂屋旅館に入った。ここには己に及川八楼、小林洋三、周再賜、寥行生の四君が海水浴のため来いたので賑かであった。白砂青松景勝の地であることは広く知られている。

ここで二日間休養して京都にかえり西寮一寮に入った。こんなことを書いていると私はまで大西の病氣見舞を口実に友人の金で遊び歩いているようであるが、われの友情は益々深くこそなれ、決して亀裂は入らなかった。

(つづく)

(神学部名誉教授)





# 同志社と民芸運動 (三)

## 西邨辰三郎



### 六

上加茂協団は、同志社中学の教諭であった青田五郎氏が結核で亡くなり、柳先生が同志社を辞任して、東京へ帰られ、またその他の事情もあって、惜しいことに解散してしまつた。しかし京都五条坂には河井寛次郎氏が健在で、先生を中心とする民芸運動は、すでに上加茂協団を凌ぐほどの勢いとなっていた。その頃から私はたしか村岡景夫氏の紹介で河井邸を訪ねるようになった。

出雲の巨匠が、腕によりをかけて建てたという河井邸は、全体がいかにも洗くて頑丈で、にやけたところが微塵もない。その母屋の中央には暖炉を切ったふきぬけの広間がある。

有名な鐘溪窯に続く見事な仕事部屋と、このどっしりした母屋をつなぐ内庭は、上下二段構えで、仕事場の方が少し高みになっている。夏の烈しい光線を遮るためか、仕事場の西側、蟬<sup>せみ</sup>に面した方には、大きな藤の棚が造られて、その下には素焼やなまの作品が、美しい化粧を待つばかりになっている。庭は全体に小石が敷きつめられて、処々に植えられた笹や萩の木や、名も知らぬ緑の樹々が、自然にいきいきと繁っているのは気持ちがいい。こんなプロポーションのよい家全体には民芸品やご自作の陶芸品が、渾然一体と群をなし、実に不思議な魅力<sup>かほ</sup>を醸し出している。このように美しい環境の中で、先生はあの素晴らしい創作を次から次へと続けられた。

それはあたかも恋人を追うようなお仕事ぶりである。普通は午後三時がお茶の時間で、その時には仕事着のまゝで炬<sup>たき</sup>ばたに來られ、多くの來客や弟子達と親しげに、感興から感興にのつての話を楽しんでおられた。夜ともなれば、静かな読書や執筆で、深い思索の時を享受しておられたのであろう。

おもえば大事な教育の場でも、このように美しい環境や、燃えるような熱情が欲しいものである。自然や愛情につつまれてできた物が美しいのなら、まして人を育成する上に、これらのものが大事であることは、言うをまたない。キリストの愛を基本とした教育の実践が、同志社の綱領であるのも道理であるが、それがたゞの謳い文句にならぬようにしたい

ものである。

河井先生のところを訪れると、先生の偉さとともに、あたかも祖師に対する平信徒のように従順な高弟達の、汗と脂の修業ぶりが目につく。それは先生が抜群の実力を持っておられたことにも因るが、近頃の学校ではこういう意欲的な姿は、だんだん見られなくなつた。

美の国を身をもって証しせんとする河井一家のチームワークも大したもので、教わると



京都五条坂河井邸広間

ころが多い。安子夫人（現在の常子未亡人）の指導のもとに、物が整理整頓され、清掃されて塵一つない柱や床は、また黒々と磨かれ、光っている。抹茶にも菓子にも厚い心の裏付けがあり、それらに預る私達は、まるで茶室にいるような心地になる。そう言えは何か窮屈そうだが、決してそんな堅苦しい雰囲気ではなく、庶民的な気楽さもあって、知らぬまに教えられているのである。

こういうチームワークによる美しさは、学

園と名のつく教育の場にも欲しいものである。

世間では、河井邸を生きた民芸館、または私設日本大使館とも呼んでいた。それもその筈で、その美しさに心惹かれる内外の訪問客が、跡を絶たなかったからである。

多くの訪問客の中でも、とくに私の記憶に残っているのは、今の

イギリス大使シロンプルチャー氏や、美術評論家のラングドン・ウォーナー博士である。

二人とも稀にみる具眼の士でもあったので、日本の美しさが直ぐ分り、河井先生とは、たいへん親しくなっていた。美しいものを通して国際的に互いの心が結ばれるということ、ありがたいことである。私はかつて、あの恐ろしくも凶暴な太平洋戦争において、アメリカの軍当局が、ラングドン・ウォーナー博士の心からなる忠告によって、京都の爆撃を中止した話を聞いたが、その大きな理由の一つには、河井邸で会得した日本美の保存という博士の念願が、直訴のかたちをとったのではないかと思われてならないのである。

考えると、世界の平和は、東西両洋の相互敬愛によって生まれるのであろう。かつてわが国でも経験した極端な西洋崇拜や、国粹主義はもとよりよくないのであって、人類というものは、相互に寄与するように造られていることの確信が大事であらう。要は世界的な観点から、外国をも十分に理解できる日本人の養成が、同志社のように国際主義を標榜する学園の使命ではなからうか。



同志社と河井先生の関係は、その後も次第に深くなってきた。その主たる原因は何といつても先生の愛嬢良子さん（現在の須也子夫人）の同志社女学校への入学であらう。良子さんは天性優しく、芸術天分も豊かであったので多くの人々から愛されたが、国語の先生で基督者の上野イトさんからは、とくに可愛がられていた。先生も良子さんの教育には、深い関心があったとみえ、上野先生の著書などを読みかえしては、「同志社には、よい先生がおられる」と始終言っておられた。

民芸の理解と愛においても第一人者である湯浅元総長は、すでに再び日本を離れ、遠く米国におられたので、河井先生とは直接交流されるよしもなかった。しかし同志社からは柳門下の村岡景夫教授を先導に、河井先生を慕う同好の士が（私もその一人であった）しばしば河井邸を訪問し、美の国の恩恵に預ったのである。

河井邸では河井先生を中心に、主として哲学、宗教、芸術などの話が交わされたが、それらは生活に即したものが多く、その度に私達は何か新しい心の贈物をもらっていた。

「拜メバ分ル」「誰ガ動イテイルノダコレコノ手」「仕事ガ仕事ヲシテイル仕事」「何トイフ今ダ今コソ永遠」などといった先生の宗教詩は、今も私の心に響いている。そのような影響もあったのか、村岡先生も平安キリスト教会の集会などでは、しばしば「美と生活」というような主題で話をされたことを覚えて

いる。  
やはりその頃、北支や朝鮮旅行をされた村岡さんに、土産品として特に買ってきてもらったふくよかな真鍮製の祭器や、李朝の白磁の壺、それにパカチなどは、いずれも素朴で美しく、朝鮮民族の歌でもあるかのように、私の心の琴線にふれた。

そんなことから、私も不思議な機会に恵まれて、朝鮮に渡ることになり、河井先生の紹介で、京城（現在のソウル）の敎新学院で教鞭をとっていた碩学、浜口良光氏の案内で、各地を巡遊し、大小の壺、石器、贗、花紋席などを購入することができた。また何となく幽言な李王家美術館や民族博物館などを見学し、朝鮮が柳先生の言葉どおり貧しくも美しい国であり、その国の芸術が卓越していることを自分の眼で見ることができたのである。

る。

私達が在学中の同志社大学は、文学部では英米文学、法学部でも西欧の翻訳の学問が中心で、肝心の東洋の心に触れる機会が少なかった。志向する国といえは、まずアメリカ、次はイギリス、ドイツ、フランスなどで、隣りの朝鮮、台湾、中国についての理解や愛情は案外少なかったのである。これは自分だけでも知れないが、実は日本の文化の母であった朝鮮なども、一段低く眺めていた。朝鮮や台湾からの学友は、あるいは疎外感をもって、私を眺めていたかも知れぬ。

しかし私は今度の朝鮮旅行によって、朝鮮を粗雑な国際概念で見ることの愚を悟った。なぜなら朝鮮の美に温められて、私の目の梁は、自ら取り除かれたからである。聖書で教えられる開眼の喜びも、おそらくこのことを言うのであらう。柳先生流に言えば、私は概念によらず、朝鮮を直観することができたのである。そしてこの旅行を契機に、私はいつそう柳先生が好きになったのである。

たしか昭和十四年の秋であったと思う。河井先生は本町の家に私を訪ねて来て下さった。それは私の結婚前祝いということで、先



河井寛次郎氏

生ご自作の大ぶりの茶碗六個を下さった。その茶碗には嫁麗な辰砂の草模様が、ふくよかな白釉の上に画かれて、玻璃体を通しての色は、みずみずしくも光っていた。

その時、情に厚い先生のお心遣いに感応した私の心は躍動していた。しかし私ははやる心を抑えて、さらに先生のご厚誼に浸ろうとした。それはかねてからの念願であった古いわが家の一部改造についてである。先生はこの願に積極的な反応を示し、即刻あらかたの構図を画いて下さった。それは単なる思い付の青写真ではなく、古い家を考えての構図であった。

感激した私は、先生のご指示とおりの改造いに着手したが、お陰でそれは伝統の仕事で

受け止めた家にもよく調和して、今や三十年を経た現在でも、何かと役に立っているのである。

その頃、東京の駒場には、大原孫三郎氏等の加勢もあって、柳先生念願の日本民芸館もすでに開設されていた。私は東京へ出ると必ず民芸館を訪ね、その建築や民芸品の美しさから、いろいろ学んだものである。

物が美しくなる原理を、人間に当て嵌めるのはおかしい気もするが、やはり同じことで例えば、健康で、正直で、質実で、役に立つ人間の方が、柔弱で、虚飾の多い人間よりも勝れていることは言うを俟たない。こう考えてくると、教育事業と民芸運動は、濃密な結縁関係で結ばれているような気がする。

## 八

新婚旅行には、関八州を廻ったが、ある日栃木県益子の浜田庄司先生を訪ねた。益子の町を通りすぎると田圃の中から浜田さんの大きな長屋門や萱葺の母屋が見える。実に大きな家で、母屋から笹原をへだて、窯場がある。裏山は櫟林で、先生の家が寺のように見える。手織木綿の筒袖にもんべいを穿いた先生は丈夫そうな顔つきで、工房や窯についていろ

いろ説明を下さった。大きな焔に火を燃やされると、図太い梁が無数に見える天井へ煙は舞い上ってゆく。大きな鍋に手打のうどんが煮られ、おいしそうな小松菜のお汁が用意される。こんなに深い自然の恵みにこたえておられる生活が他にあるだろうか。

私たちはやがて先生の豊富なお話をうかがいながら、共に食事を楽しんだのである。

イギリスに長年滞在された先生のお宅に美しいスリッパウェアの大小の皿や、私の好きなウインザーチエアーなどが、あちこちに列べられ、健康な工芸の手本となるべき品々が無数に転がっていた。私は同志社の予料時代に、英書講読によって興味をもちはじめたイギリスのジョン・ラスキンや、彼の志を受け継いだウイリアム・モリスのギルド制度のことなどが連想されて、イギリス通の浜田先生にもきいてみたいと思ったが、とくかくその日は、先生にお目にかかれるだけでもうれしかったし、食事や撥ね物の二、三点をいただくことで大満足をして、見事なお宅を退出した次第である。浜田先生が長屋門の前に立ち、手をふって、私どもが遠くに行くまで見送っていて下さったのは、まことに印象的



でうれしかった。

それから私どもは、佐久間の藤ちゃん（佐久間藤太郎氏浜田門下）を訪ねたが、藤ちゃんもまた五条坂の河井門下生が、河井先生を敬慕するように、浜田先生を慈父のように慕っていた。萱葺四つ目立ちの簡素で美しい藤ちゃんの家には一目惚れをしました。その家の縁側で、この地の伝統的な仕事を続けている皆川マスの流れるような筆勢の「山水」や「窓絵」の土瓶絵付を見学した。驚いている私達に、やがて藤ちゃんもマスマ女も、益子の民芸についての話などをしてくれたが、その中でも、たびたび浜田先生の偉さについて語ってくれたことを覚えている。

今は文化勲章受領者の浜田先生も、大正十三年イギリスより帰国され、東京より益子に移転されようとした時には、他国者として、あちらこちらで断わられたのを、やっと佐久間の藤ちゃんの家の一部屋を借りて、仕事を開始されたのである。

このことについて先生は、次のように言っておられる。

「私は細工場の一隅と一台のろくろを借り、そこにあるだけの土と釉とを使わせてもらっ

て、作ったものはその窯のどこかへ入れてもらい、諸費用を払うという形で、つまり素手で仕事を始めました。私は益子という健康的なふるにはいって、学校、試験場、英国で十年間についた垢を洗い流し、出直そうと思いました」と。

私はこの話をきいて、さすがに浜田先生だと思った。イエスがガリラヤ伝道中、あの有名な山上の教えの中の第一声、「こころの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」（マタイ五ノ三）と言われた言葉の意味が、身に沁んで分るように思えた。名教の中、おのずから楽土あり、である。

浜田先生はこのように貧しい心で、益子の自然と大地に身を委ね、そこに腰をおちつけ、益子の土地柄から、人柄から、暮しぶりからいろいろ学ばれたのである。同時に先生が益子に与えられた影響も大したものであったと思うが、ご自分からは何も言われたことがない。柳先生は、「浜田は大地を一步一步確かに歩いて行く」と何かに書いておられるが、私もそう思う。浜田先生のお人柄や作品から、先生はいつも自然で、鷹揚で、確実であられることを感得する。先生が大自然の神秘に驚

き、また歓び、多くを学んでおられる深い教知を私は知らされる。もとよりそれはアニミズムのような自然崇拜ではなく、自然を通しての「窮極の真理」の把握であろう、と私は推察している。また聖書から引用するが、イエスが野の花を見て、ソロモンの栄華もこの花の装いには遠く及ばない、（マタイ七ノ二八・二九）と喝破されたその生命の美しさであらう。

まあこのような連想を画きながら、私は人生のスタートともいふべき新婚の旅を続けていたのである。

## 九

さて私は、同志社大学時代からこの方多く西欧文化の影響を受け、一つの精神的要求として、基督教を新鮮な気持をもって受容れることができたのである。創立者新島先生の精神はもとより、大学予科時代には、片桐哲先生を通して基督教概論を、中島重先生からは、社会的基督教を、また大塚節治先生からは、基督教倫理学を学んだ。また宣教師バトレット博士やシャイペリー氏からは、バイブルクラスとともに西洋生活様式なども教えられ、同志社のバックボーンとしている何ものかに

触れたことは事実であり、またありがたいことでもあった。もし私が当時の帝国大学やその他の官公立で教育を受けたとしたら、あるいは一生キリスト教の真理に触れることはなかったかも知れない。これと同じく、もし私が、民芸運動というものにひき入れられなかったら、あるいは長い間の仏教の血をついでいる自分を省みる余裕がなかったかも知れない。今や小さい私にも、東西がいつの間にか密接に邂逅している事実を知り、西洋文化とともに、東洋文化をも大事にしなければならぬことを痛感するに至ったのである。私はこの異常な歴史的恩寵をありがたいと思う。これを宗教真理探求の面よりすれば、聖書とともに仏典をも偏見なく読めるようにすることである。さらに言葉を加えるなら、基督教と仏教とは、対立抗争の形ではなく、親しく語り合う対話の姿勢をとらなければ、両者の真理の宝庫は徒らに閉されたまゝになるであらう。柳先生が基督教とともに仏教からも多くの真理を学ばれ、単に西洋の宗教哲学をそのまゝ踏襲されるのではなく、東洋の宗教経験をも生かし、ついに世界的にも前人未踏と言われる工芸美学の基礎を確立されたこと

は、その社会的意義の深さからも、その真理の永遠性からも、絶賛されていゝと思う。

よく見ると河井先生の陶芸も浜田先生のそれとも、柳先生の美学に即応したまことに立派な作品で、輝やかしい名誉を、今後の世界窯芸史上に刻むであらうと思われる。なぜならそれらの民芸的作品はすべて無銘であり、東洋的というなら、小我を捨てて大我に生きた先生達を、証明して余りある美しさを呈しているからである。私は今や洋の東西にとらわれぬそのままの姿が、洋の東西から絶賛を浴びるという不思議なパラドックスを、両先生の陶芸より、また種々なる民芸品を通して、教えられたのである。

いづぞや私は、雑誌民芸で「東洋の心と西洋の心」と題する鈴木大拙先生とイギリスの陶芸家バーナード・リーチ氏の対談を読んだが、その中でこういうくだりがある。

リーチ ニューヨークでは、柳さんに念仏と禅の境地がどのように一致するか、非常によく説明していただいた。それで柳さんの著書「美の法門」と「美の浄土」とを英訳したのです。

鈴木 あなたの英訳の草稿を送っていただ

いたが申し訳ないが、まだ見ていない。しかしこれは柳君が自分の悟りを書いたものですよ。いいものです。

リーチ そう、そう。

鈴木 いま道元禅師の著書を読んでいたら偶然同じようなことが書いてある。

聖書にシナイ山上でモーゼが神に向かつて、「あなたの名は何というか、あなたの神のみ名を村の人々に伝えたい」というと、神が「私はあるところのものである」と答える。柳君はこの点をとりあげている。

リーチ 「ある」ということですか。

鈴木 それが日本語でいえば、ありのままそのままということですね。たとえばマイステル・ヨハンネス・エックハルト（ドイツの神秘主義者）は神のあること（イゼネス＝存在）は私のあること（イズネス）だといっている。これが眼目なんです。

こうした問答はなお続くが、世界の二大宗教とも言える基督教と仏教とが、自然ということでは対話をしているようなところもあってなかなかおもしろかった。もっともリーチ氏はバハイ教の信者であるらしいが。（つづく）

（同志社香里中・高教論、昭七・六、法卒）

# アーモスト大学再訪

北垣 宗治

今年同志社の創立者新島襄がアーモスト大学を卒業してから百年目に当る。一九四七年以来アーモスト大学代表として同志社に派遣されているオーテス・ケリー教授は、かつて新島襄こそ、欧米の大学を正式に卒業した

はじめての日本人であるという仮説を立てたことがある。幕末の頃に、九州あたりの野心的な雄藩が、幕府に内密で欧米に留学生を送ったので、この頃欧米に学んだ日本人の数は案が多い。しかし正式の学士号を取って卒業した日本人となると、新島襄の一八七〇年アーモスト大学B・S（理学士）はまぎれもない事実であり、日本の教育史上の輝かしい記録である。ケリー教授がさきの仮説を唱えはじめてから二十年近くになるが、一八七〇年以前に欧米の大学で学士号を取った日本人の

ことを私はいまだに聞いたことがない。こちらでもうこれを仮設の段階からはずしてもよいのではないかと私は思うのである。

そういうわけで、たまたまこの時にハーバード大学に留学していた私は、今年のアーモスト大学の卒業式にはぜひとも出席したいものと願っていた。私は妻と二人の子供をひきつれてボストンからバスで三時間の旅をして六月四日、アーモストへ赴いた。そして出会って話することのできた人々には必ず、なぜ私がアーモストまでやってきたかというわけを話した。三日間のアーモスト滞在を通して同志社の名を聞いたことのないアーモスト人にはほとんど出くわさなかった。以上はその報告とコメントである。

一

アメリカの大学は卒業式を五月の末から六月のはじめにかけて行う。それは著名な人々が招かれて卒業式の記念講演を行う時期であり、各大学がさかんに名誉学位を贈る時期であり、さらに校友にとってはレユニオンの時期である。この時期にアーモストにやってくる人々はみな校友会の本部で登録することになっている。校友会は宿舍のあつせん、レユニオンの計画と準備、さらにベイビー、シッターの世話までする。卒業する学生の父兄であらうと、校友とその家族であらうと、アルバイトの女性たちをずらりと揃え、てきぱきと宿舍を割当てていく。キャンパスの中に十三の寄宿舎をもつアーモストは、宿舍にこと





欠かない。その上まだ必要とあれば、隣のマサチューセッツ州立大学の寄宿舎を借りることができるとができる。

私たちは車をもたないので、キャンパスの中に泊まりたいと申し出ると、さっそくサウス・カレッジという、アーモスト大学最古の建物の四階の一隅を割当てられた。それはアーモスト大学の歴史に興味をもつ者にとつては、実に愉快なことであった。この大学は一八二一年に創立された男子のためのリベラル・アーツの大学で、創立者の中には有名な辞書編纂家ノア・ウェブスターや、詩人エミリー・ディキンソンの祖父サミュエル・フアウラー・ディキンソン等がいた。一八二一年の大学創立から二年間というものの、小高い丘の上にあるこのサウス・カレッジというレンガ建築はアーモスト大学の唯一の建物であった。それは寄宿舎であり、教室であり、図書館であった。ここで学んだ人々のうちで、第一回卒業生の数は二名。その一人ピンダー・フィールド (Pinder Field) は牧師になった。もう一人エベンザー・スネル (Ebenezer S. Snell) はのちアーモスト大学の教授となり、五十年間もアーモストの教育に身をささげ

た。その教え子たちがまたアーモストで教えた。そして、そのまた教え子たちの何名かがアーモストの現在の教授陣の中に加わっている。

新島襄がアーモストに学んだのは一八六七年から一八七〇年にかけての三年間であった。新島も、内村鑑三 (在学期間一八八五年—一八七年、B・S) もともに一八二三年にたてられたノース・カレッジに住んだといわれる。ノース・カレッジとサウス・カレッジは全く同じ恰好をして、アーモストのキャンパスの中心をなすジョンソン・チャペル (一八二七年建設) の両側に立っている。現在ではサウス・カレッジ、ノース・カレッジともに寄宿舎としてのみ使われている。同志社でいうと、致遠館を高さだけ二倍にしたようなスタイルである。その内部は何度となく改装を重ねているので、一寸入っただけではそれが一八二〇年代にたてられたものとは思えない。窓から外をのぞいて、レンガの欠け具合や、レンガの古びた色合いを見て、はじめてこれが相当古い建物だとわかる程度である。現在ではむろん徹底したセントラル・ヒーティングの設備があるが、十九世紀では石

炭のストーヴを置いていたようで、内村は寒い冬の休暇中、行くところもなく一人ノース・カレッジにとどまり、重い石炭のバケツを五階の部屋まで運びあげながら、三階までのぼったときインスピレーションをえて、階段にひざまずいて感謝の祈りをささげたといわれる。

ジョンソン・チャペルはアーモストを訪れる同志社人にとって、いわば「至聖所」である。なぜならアーモスト大学の中心を占めるこの礼拝堂の中に、一八七〇年卒業生新島襄の有名な油絵の肖像画が掲げられているからである。それを寄贈したのは新島のクラスメイトであった。アーモスト大学はそれをチャペルの正面に向かって右側の名誉な位置に掲げた。誰がそこに掲げるようにきめたのか、また何時からかかっているのか、私は知らない。しかし私たちにわかっていることは、アメリカと日本とが四年間の大戦争をやっていた時に、誰一人として、その日本人の額を外せ、とは言わなかったことである。その出来事はアーモスト大学の誇りであり、同時に同志社の誇りでもある。

この肖像画に関する今一つの重要な点は、

それがアーモスト館を除くと、同志社中のどこにもない種類の新島像であることである。

同志社のチャペルや総長室をはじめ、同志社の建物のいろんなところに掲げてある新島襄のすがた、つまり私たちが新島先生というときに反射的に思い浮かべるイメージは、いかにもどっしりとした、抱擁力豊かな温顔である。ところがジョンソン・チャペルの中の新島は、いわゆる公認の新島像とは全くちがった感じの新島なのである。それはやせた——いな、やせこけた——新島である。それはうつむき加減に、悩みながらじっと考えこんでいる新島である。主観的な表現であるが、それは海を渡ってそこまでたどりついた同志社人がその前に付むとき、必ず何かを静かに語りかけてくる新島なのである。

私は一九五七年の一月から六月にかけてアーモスト大学で勉強させてもらう機会を得たのであるが、その当時と現在とではキャンパスのもようはがらりと変っている。ジョンソンチャペルの中の肖像にもいくらかの移動がおこった。この礼拝堂の壁にはアーモスト大学にゆかりのある著名な人物の肖像画が二十五ないし三十くらいもかかっている。十三年

前、正面向かって左側には、アーモスト大学の第三代総長エドワード・ヒッチコック博士がかかっていた。十九世紀の中頃、アーモスト大学の財政が危機に落ちり、まさに廃校の憂目に会おうとしていたところを救って、十九世紀の後半へとバトン・タッチした人物である。新島の肖像はかつてこのヒッチコック総長の肖像と並んでいた。しかし今は新島と並んで正面に飾られているのは、アーモスト大学卒業生のうちで合衆国大統領となった唯一の人物であるカルヴィン・クーリッジである。そしてクーリッジ大統領から左まわりに歴代総長の額が、その就任順に並んで、チャールズ・コール前総長まできて終っている。階下の額はそれだけで、ギャラリーの方には大学の功労者その他の額が並んでいる。

背面の目立つ場所を占める一人は「アーモスト」という名の源である英国の將軍ジェフリ・アーモストと、アーモスト大学が生んだ有名な説教家ヘンリー・ウォード・ビーチャーである。その他同志社女子大のジェームズ館や、同志社アーモスト館設立の功労者というべきアーサー・カーティス・ジェームズ氏とか、昨年までアーモスト大学の理事長をつ

とめ、また第二次大戦直後西ドイツの高等弁務官（わが国ではマツカーサー元帥が果たしていた役割）をつとめたジョン・マックロイ氏らの肖像がかかっている。

## 二

六月五日の卒業式の日、アーモストはいくく雨であった。毎年卒業式が行われる体育館前の広場に準備されていた何百という椅子は雨に濡れていた。雨天体操場に急に式場が設けられた。アーモスト大学の第一四九回目の卒業式は九時半からおごそかに始まった。

卒業予定者は黒いガウンに黒い角帽をつけるならわしであるが、今年はこの大学でもこの伝統に対する反逆者があらわれ、そういう「無意味な」しきたりに従わないでいこうとする学生が目立った。オベリン大学の卒業生たちはガウンと角帽を借りる費用を一切平和運動に寄付する申し合わせをし、学生たちは一人としてアカデミック・ドレスをつけなかったという。アーモストの二九五名の卒業生のうち八十パーセント以上はガウンと角帽をつけていた。しかし黒い袖をブルーやピンクのリボンで結び、インドシナ戦争に抗議の

意思をあらわす者も多かった。ガウンを着ないレジスタンス派のスタイルもまちまちであった。きちんと背広を着てネクタイを結んでいる者、よれよれの白パンをはき、上着なしでネクタイも省略している者、等々、さまざまな衣装であった。卒業予定者たちが向き合って人垣を作る中を、グラス・バンドの演奏に合わせて、名誉学位受領予定者、理事、教授陣が、これまたガウン、角帽、色とりどりのフードをつけて入場する。式杖 (mace) をもって行列の先頭に立つのはハンプシア郡の地方長官 (Lieut.) で、この役人はマサチューセツ州の代表である。このシェリフが式杖で舞台の上をとんとん叩くことから式典が始まる。

先ず国歌「星条旗よ永遠なれ」斉唱。まるで国立大学なみである。卒業予定者の中の十数名は右手をあげてV字サインを作った。これは今では平和のしるしである。中にはこぶしを固めて上にあげ、うなだれる者も若干居た。これは侮蔑のしるしである。しかしアーモスト大学の卒業式に国歌が入っていることは私にとって驚きであった。

アーモストではプリンプトン総長自身が卒

本式の司会を兼ねる。記念講演を行うI・F・ストーン氏を総長が聴衆に紹介する。この記念講演者を選ぶのは卒業していく四年次生の特権である。I・F・ストーンといっても全く聞き慣れない名前であるが、アーモスト大学の今年の卒業クラスがストーン氏を選んだことは実に意味深いことであった。ストーンはジャーナリストである。時事評論家といってもよい。『I・F・ストーンのウィークリ』

を自ら編集、出版しており、ニクソン大統領の対外政策に対し、きわめて批判的な論陣を張っている。特に大統領やミッチェル司法長官の対南部政策の偽善ぶりを攻撃するときの語調にはきわめてはげしいものがある。しかし、そうかといって彼は単なる時流に乗る左翼証論家というわけでもない。それは、たとえばソ連や東欧の市民が、まだどれだけ自由のない状況の中であぐまにしているか、といった面をも鋭く捉えて報告していることにあらわれている。ストーンは米国内やヨーロッパの各新聞の中から注目すべき論説、表現のたぐいを絶えず探してきてはそれを紹介する。今の学生たちや、リベラルな立場に立つインテリの間にストーンはかなり広く読まれてい

るのである。

アーモスト大学の今年の卒業クラスの中にドワイト・デーヴィッド・アイゼンハワー二世がいた。彼はアイゼンハワー元大統領の孫であり、しかもニクソン大統領の令嬢ジュリーと結婚しているので、米国では最も著名な若者の一人である。ジュリー夫人もまた同じ頃に隣のスミス女子大学を卒業した。しかしデーヴィッド・アイゼンハワーは卒業式を欠席することを早くから宣言していた。それは級友たちが、ニクソン大統領にあからさまに批判的であるI・F・ストーンを卒業式のゲスト・スピーカーに招いたことに対する彼なりの抗議の表現だった。このため、級友の一人が、ストーンに対するアイゼンハワーの誤解をとくために書いた手紙が『ニューヨーク・タイムズ』にのったほどである。(ジュリー夫人の方もまた、混乱を避けてスミス女子大学の卒業式を欠席したといわれる。事実上、ニクソン氏は一父兄として娘の卒業式に出席することはおろか、アメリカ中のどのキャンパスにも足をふみいれることは先ず出来ない状態にあると言わざるをえない。)

ストーンの演説は、柔い声であったため、



私にはよく聞きとれなかった。ニクソン政権に対する批判が中心を占めていた。ところで学生たちが拍手を送り、父兄の中にもそれに和した人が少くなかった。

グリークラブの合唱ののち、九名に名誉学位が授与された。ストーンにはL・H・Dだった。九名のうち五名はアーモスト大学の卒業生で、その一人はミズーリ州選出の民主党上院議員トーマス・イーグルトン氏（一九五〇年卒）で、最高の名誉学位であるLL・Dが与えられた。また、今年九月から、アーモスト大学、スミス女子大学、マウント・ホリヨーク女子大学、マサチューセッツ州立大学のきもいりで、同じ地域に開学することになったハンプシア大学の初代総長、フランクリン・パタソン博士にもLL・Dが贈られた。プリンプトン総長の式辞ののち、一人一人に卒業証書が授与された。ギフォード部長が名前を読み上げると、その学生は壇上を右から左へと歩き、中央に立っている総長の握手を受け、証書をもらうのである。このやり方は卒業生の数が二九五名という少数だからこそ可能である。見ていると、胸を張って颯爽と出てくる者もあれば、おずおずと総長に近

付く者もあった。中には在学中つい分暴れん坊だった学生もいたにちがいない。総長の表情、手の握り方、何か言葉をかけている様子などから、人間的な心の通じている面を感じとることができた。一人だけ握手を拒絶し、証書だけ受取った学生がいた。総長の方が一寸めんくらったようであった。また一人だけ赤ん坊を抱いて壇上に登った学生があった。聴衆はびくりしてその風変わりな卒業生に注目した。彼はむろんガウンも角帽もつけていず、シャツのままだった。総長は彼に握手しついでにその赤ん坊の手をも握ったので、一斉に拍手が起った。（私はその場ですぐ“Make love, no war!”という、昨年来の有名な反戦のスローガンを思い出した。晴の卒業式に、生後数ヶ月の赤ん坊を抱いて出席するとは、ヴェトナム戦争の時期に大学生活を送った若者の何という痛烈なパンチだろうと感心したのである。ところが、あとで彼を教えたという歴史の教授の話では、本人にそのようなつもりは毛頭なかったという。彼は貧しかったが、学生結婚した。そして妻が毎日働いて彼を助けている。その日もまた妻は働きに出ている筈だ、というのである。）

卒業者名簿の中に二人の日本人の名があった。一人は内村スカラの永田伝君であるが、この日は欠席であった。もう一人の芝生瑞和君には、とうとう会う機会を逸してしまった。

プログラムが全部終わったところで、理事長のメルル氏（Mr. Oliver Boutwell Merill）が立って、プリンプトン総長から、一九七一年六月をもって総長の職を辞任したい旨申出があったこと、アーモスト大学理事会はプリンプトン博士になお総長として頑張ってほしいことを希望したが、辞意が固いので、これを受けけることにした、という報告がなされた。プリンプトン総長に対する感謝の拍手が一斉におこり、なかなかかなりやまなかった。

こうして卒業式は平穩のうちに終った。ハーバード大学のように、外部の人々の妨害に会って二十分余り卒業式を中断した例もあれば、ボストン大学のように卒業式をとりやめた例もあった中で、トラブルなしに卒業式を終えること自体、一つの成果であったように思う。

その日の午後から校友向けのプログラムが続いた。卒業してしまえば全員が校友である。アーモストでも、他のアメリカの諸大学と同じく、卒業式と校友のレユニオンは同じ時期に行われる。といっても校友全体のレユニオンということがなく、特に最近卒業のクラス、それより古いクラスは五年きざみに集まる。このレユニオン・クラスは今年（一九七〇年）の場合、一九六九（昨年の卒業生）、六八、六七、六四、六〇、五五、五〇、四五四〇、三五、三〇、二五、二〇であって、一九一九年以前の卒業生（つまり半世紀以前の卒業生）は全員大学の招待で大先輩の待遇を受けるわけである。校友の中で母校から名誉学位を受ける人は、たいていそのレユニオンクラスの人である。さきにあげたイーグルトン上院議員は一九五〇年の卒業生であった。こうしたレユニオンのクラスに属さない校友が出席することもむしろ差支えないわけである。夜になると、クラスごとにフラタニティ・ハウスや寄宿舎や、町の中のクラブを借りて交歓する。

私はその夜一九三五年クラスの集りに出てみた。場所はアーモストのゴルフ・クラブだ

った。暗い雨上りの道を、濡れた灌木のにおいを嗅ぎながら歩いて行くと、急に視界が開けて赤いチョウチンが見え、盆踊りのようなはなやかな音楽が流れてきた。一九三五年組はむしろ私のクラスではない。私はそのクラスの代表であるアーサー・イングリッシュ氏に会いたかったのである。イングリッシュ氏といえば同志社の卒業生の中にもご存知の方があるにちがいない。一九三五年から二年間、氏はアーモスト大学学生代表としてアーモスト館に住み、同志社大学予科で英会話を教えていた筈である。私は初対面であったが、会ったとたん、アーモスト館の入口に掲げてある若いアーモスト人の写真の中のある人だ、ということがすぐにわかった。今でもハンサムでかっぶくがよい。同志社から来ました、と言うだけで歓迎された。私はイングリッシュ氏に同志社とアーモスト館の現状をかいつまんて報告した。氏は自分の同志社時代をなつかしげに語った。当時はアメリカ人ということだけで、警察がつきまとう時代であった。氏はその場に居合わせた人たちに私を紹介した。びっくりしたことは、プリントン総長夫妻もその集りに来ていた。日本に行ったこ

とがあるという人も多く、中には話し出したとまらないうような奥さんもいた。十一時ごろ、親切な一人が車で私をサウス・カレッジまで送り届けてくれた。

時間を少し逆戻りさせて、その日の午後の校友向けのプログラムを紹介すると、先ず二時から講演会があり、三つの講演が行われた。音楽、絵画、そして学生運動に関するものであった。五時半から校友会本部でガーデン・パーティー。出席者は老人が多かった。

校友会の総会は翌日ジョンソン・チャペルで開かれた。この間子供たちのために特別のプログラムも作られていたし、テニスコートとプールも校友むけに開放されていた。

今一つ面白いプログラムは、その次の週に五日間にわたり「校友大学」が開かれ、文学、音楽、生化学（biology）の三科目が開設されたことである。担当はアーモストの教授陣が当る。その間、パネル・ディスカッションも開かれる。何名ぐらいの校友が参加するのか私は聞きおとした。毎年開設科目が異なり、早くから全校友に予告しているところから見ると、かなり周到な準備と計画がなされていることがうかがわれるのである。

#### 四

アーモスト大学は同志社との密接なつながりを持つ一つの利点と考えている。アーモストが毎年発行するカタログは、二十一行にわたって同志社大学のことを紹介している。私は以下に、今少し現在のアーモストのことを書いてみたいと思う。

現在のアーモスト大学はむろん新島、内村の留学した時代のアーモスト大学ではない。この二人の日本人に深い感化を与えたシーリー総長のような人物はもうアーモストには存在しないし、恐らく存在しえないのだと思う。十三年前には学生はまだ少くとも週二回チャペルに出席する義務があった。しかしやがてこの制度は廃止された。いな卒業式にさえ讃美歌、聖書朗読はおろか、祈禱も祝禱もないのである。あの日全員で歌ったのは「星条旗よ永遠なれ」であった。私はその一週間にハーバード大学の卒業式に列席したが、ここでは立派な祈禱で式が始まり、祝禱でもって式が終った。十九世紀のはじめに、ハーバード大学のユニテリアン化に抵抗して、ニュー・イングランドのピューリタニズムの正統

を護ろうとしてたてられた筈のアーモスト大学の現在と、かつてのユニテリアンの進歩思想のメッカであったハーバード大学が一九七〇年にどんな儀式を守っているかをくらべてみると、皮肉な対照があるといわざるをえないのである。

アーモスト大学は今でも全寮生を維持している。新入生はフレッシマン・ドミトリに入らなくてはならない。二年次生以上になると大学の周囲に散在しているフラタニティ・ハウスか、キャンパスにある大型の寮のどちらかに入ることになる。かつてのはなやかな学園生活の場であったフラタニティの全盛時代は過ぎたようで、今ではアーモスト館くらいの大きさの小型の寄宿舎といったところである。(事実、アーモスト館はアーモスト大学のフラタニティ・ハウスの典型的な建築様式を採って建てられたものである。)これに対してアーモストは大型の寄宿舎が十三棟もキャンパスの中にあり、サウス・カレッジ、ノース・カレッジといった一八二〇年代のものから、一九六三、六四年にたてられた五つの新寄宿舎がある。二年次生以上で、フラタニティに住む学生と、大型の寄宿舎に住む学生

の数は今では相なればしているそうである。食事は全員がヴァレンティン・ホールで取ることになっている。

このような徹底した全寮生は贅沢な制度である。しかし、考えてみると、全人教育とか人格教育とかよく言われるが、こうして一日二十四時間、同じ場所に住み、同じ場所に学び、同じ場所で食べるということが、教育のために最低限必要であるという、抜き難い信念のようなものがそこにかがえるように思う。それは一つには英国から伝わった大学教育の伝統である。今一つは、米国の大学が都市よりは田舎に多く建てられたという理由にもよるであろう。にもかかわらず、ボストンの北にあるハーバード大学でさえ、アンダゲラデュエートの学生は全員寄宿舎に入らなくてはならないのである。この制度をくつがえそうという動きはまだ出ていないように思う。それでは現在、フラタニティ・ハウスや寄宿舎の中で何がどのように行われているのか。私は或るのびのびとした、自由な雰囲気、知的な刺激のし合い、反戦と平和に関する共通の関心、議論をし、意見を交換するための開かれた態度——そういったものを感じたとい

う以外に、具体的なことを何一つ書けないことを残念に思う。

アーモスト大学は今でも一流のリベラル・アーツ・カレッジと見なされている。しかしユニヴァーシティでないから、程度が落ちるなどと考えるのはまちがいである。私はこの一年間ハーバードの英文学のコースに出ているが、学問的訓練のきびしさの点で、アーモストの方がきついいことを知った。アーモストではセミスターに二科目落第すると放校、という規定がある（学生はふつう四科目とる）。しかしハーバードの場合、二科目おとしてもいろんな理由をつけて何とか生きのびることが可能である。提出を要求されるペーパーの数もアーモストの方が多かった。むろんハーバードの学生総数の半数は大学院生で、その老大かつ複雑な組織のおかげで、ハーバードにはそれなりの特典がある。ハーバード大学の英文学の教授のうち二人はアーモストの出身である。彼らが今なおアーモストの教育を高く評価していることは興味深い事実である。

あのきびしさの中で、なおスンマ・クム・ラウデ（Summa Cum Laude—最優等）を取り

る学生が十七名もいたことは驚異であった。

それは全科目の平均点がA<sup>+</sup>であるということである。その上で彼らはオナーズの論文を書いたのである。その十七名の中から論文の標題を拾ってみると、「一九四二—五二年におけるアメリカの極東政策の発展、特に沖縄の保有を中心に」「キェルケゴール研究」「伝達の理論と言語」。芸術的な学生は、ピアノのための作曲や、小説を書いて提出している。

殊に一九六六年に始まった独立研究の制度は優秀な学生にその創造的な才能をのばさせるために、正規の要求単位を省略し、大学の認めたチューターの指導のもとに、二年間専ら選んだプログラムに集中させるというものだ。こうした独立研究組の中から九名が、さきに述べた最優等に入った。（なお、クム・ラウデではあったが、卒業式をカットしたアイゼンハワー君の論文は「多政党としての共和党出現の分析」というはおえましいものであった。）

新島襄がアーモスト大学を卒業して百年。新島襄が同志社を設立して九十五年。その間にアーモストが、また同志社が経験した変化はまことにいじむらしい。今は大学がこの世

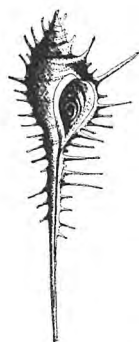
から存在理由を問われ、はげしいチャレンジを受けている時代である。日本の大学もアメリカの大学も基本的には共通の問題をかかえている。私は一同志社人として、今なお新島襄を百年前にはぐくんだ小さなアメリカの大学に学ぶことが多いことを信じている。その大学を過去十年間立派に指導してきたカルヴィン・プリンプトン総長の言葉を引用してこの報告を終りたい。

「アーモストの使命は個人に対する窮極的関心ということばに最もよく示されている。これはひとりびとりの学生のために、創造的な仕方で気を使うことを意味する。それはまた個人の中に存在している諸特性（人間であることに誇りを感じさせるような諸特性）を発見し、それを発展させようと努めることを意味する。これは神秘に属することであり、これこそが教育のチャレンジである。人間は人間であって神でないこと、人間は奇跡をなすことも魔術を司ることもできないこと、人間の偉大さは理解からのみ来ること——こうしたことを想起させることこそが「アーモストの使命」なのである」

（72頁へ）



# 『教皇パウロ六世』との会見記



志村 卯三郎

## 白線の国境

それは一九七〇年、主のご受難週前の水曜  
日、三月一八日午前一時であった。一一時  
までに入場という指示なので朝から宿舎、ロ  
マの繁華中心街にあるサボイホテルを出て市  
内を観光。バルカッチャの噴水、コンドッテ  
イ通り、キケロ像のあるロマ最高裁、テベレ  
ー川を渡り円形の聖天使城——これはオペラ  
のトスカに出てくる——を経て目ざすサン・  
ピエトロ・キャンシードラルへ。

バチカン市国へ——私どもをのせたバスは  
路面に白く横に引かれた一線を越えた。この  
白線、それがロマとバチカン市国の国境なの  
である一九二九年二月一日、教皇ピウス一  
一世がガスバリ枢機卿をしてムッソリーニ首  
相との間に結ばれたラテラノ条約で、ロマが

イタリアに占領された一八七〇年以來曲折を  
経た教皇領ははじめて聖庁の絶対統治と主権  
的裁治権が認められ、住民約一二〇〇名、四  
四ヘクタールという世界最小国土をもつバチ  
カン市国は確立したのである。このバチカン  
市国の不可侵的中立地帯確立のためにムッソ  
リーニは不朽の功績をのこしたといえよう。

## 聖ペテロ広場と大聖堂

聖ペテロ広場——その中央に高く聳えるオペリスク、左右の一対の大噴水、広場を抱くように左右に弧を描いた大柱廊、柱廊の上には一つ一つ石像が立ち欄干のようになってゐる。一二世紀ベルニーニの作。

段を上った奥にドームを戴いた大聖堂、入口に天国の鍵をもつペテロ像、右に斬首され殉教したしるしに剣をもったパウロ像、絵画的な服装をつけたスイス青年よりなる衛兵の姿。聖母マリヤ、逆十字架につけられたペテロ、パウロなどがリリーフされてある青銅の扉から堂内に入る。ミケランゼロ二四歳の傑作ピエタは白大理石、その師であつたサヴォナローラが火刑に処せられた一四九八年、死別の悲しみに打ちひしがれた思いで鑿を握っただけに、悲しみのマリヤと抱かれてゐるキリストの表情は深刻悠遠のものがあつた。ベルニーニ作の厨子の前には巡礼の司祭たちが祈つてゐた。

## ペテロの墓・聖櫃上の聖壇

一一時、定刻の直前に謁見許可書を渡して指定の席へ案内された。アントニー・アノー・ジュ神父さまのご案内、京都と舞鶴のカトリック教会につとめた後東京のカトリック大神学院で教鞭をとつたという。日本語は日本人よりもお上手な七〇歳の老翁。この日は毎週水曜日の教皇の定例謁見日で全世界から一万人も思はれるほどの巡礼の大衆がそれぞれ手続きをへてすでに堂を埋めていた。大聖堂は十字形、その十字の交叉する場所に独立して聖壇があり、四隅の青銅の円柱が天蓋を支えている。聖壇上には中心に受難節をあらわす紫色の蔽いをかけられた小十字架、その左右に三本つづ一列に燭火、聖壇上前部に教皇座の椅子。この聖壇の直下の地下に使徒ペテロの遺体を納めた聖櫃が安置されてゐるのである。ペテロの墓はピウス二世のとき考古学的発掘の結果科学的にも立証されてゐるといふ。

## セドウラの教皇

さて私どもの着席した場所であるがそれは聖壇に向つて左側の最前列であつた。この席は当日の受謁者中の最上等席であり最も優遇された席であるということがあとでわかつた。定刻に教皇パウロ六世は前後六人ずつの美々しい服装をつけた人々に昇かれてパチカンパレスから大聖堂に進入、赤色に金色で飾つたこのセドウラという椅子状の座架に乗つて、両手を上げて左右交互に祝福をおくりながら聖壇に向つて進む教皇さま。やがて聖壇を右側から一周するように聖壇背後へまわり左側の私どもの直前に来てとまり降り立たれた。アノー・ジュ神父さまはセドウラに乗つてこられるのは決して威容を添えるためではなく、歩いたのでは満堂の会衆に見えないからであると二度もくり返して説明して下さつた。教皇服の絹の白いスータンを裾長に着、ツーチェックティという白い帽子をかぶつて教皇さまは私どものまん前三メートルに立つ。先導し扈從する従者、昇いて来た一二人、皆膝まついて礼をする。一斉に拍手また拍手。

かくて教皇は薄茶色の六段ある踏台を上り、聖壇上の教皇座についた。赤色のツーチェッティに黒の法服を着た枢機卿と無帽の二人が書類を持って後から聖壇上の脇に控える。サン・ドミニコの頌歌の韻律が底力のある静けさで流れる。

## 教皇メッセージ

受謁者一同着席、やがて教皇は立つて今日のジェネラル・オウディエンスのメッセージを読みあげる。主題は「キリスト者の克己生活の価値について」であった。

「克己と犠牲の二つはキリスト者生活を証明する証印である。『たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは持ち物にはよらないのである』(ルカ一二章一五節)。主の十字架は生活を規定する。われわれはキリスト教的自己犠牲を通して凡ゆるものを奪われるということを悟らねばならぬ。それは多くの危険からわれらを遠ざけ、有害なものからわれらを守ってくれる。げに十字架はわれらをして真に自由を得しめ、かつ真に命ある人たらしめ、われらの弱き

を美德に変質せしめるのである。」

メッセージを終えて教皇は坐した。万雷の拍手。伊、独、仏、西、英の五カ国語。世界の交わりの時はつづく。聖壇四隅の月桂樹の浮彫りで飾られた四本の螺旋形の青銅の円柱、それはかつてギリシャのパンテオン神殿にあったものをここに移したという。異教の神々も今、福音の奉仕者となつていると見るべきであろうか。それらは聖ペテロのみ墓を守るが如く、教皇座につつましく仕えているかの如き荘厳をただよわせている。

側壁上部の四つのコーナーにはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書記者であろうか神のことは書いてある。このモザイクのギリシャ文字とラテン文字は一字の太いさ一、七〇メートル、ペンの長さ八〇センチ、それがあたかもキリストの生涯を今も参拝者に語りかけているようである。

## 日本チームへの挨拶

パウロ六世は再び立ち上った。斜め後方に控えた僧が差出した本日の受謁者名簿である。ここに参列した団体名を読み上げそれぞれに

れに手短かに祝福のことはおくる。その団体が拍手する。教皇は双手を上げて祝福をおくる。このようにしてここにかしこに次々に大小の団体が大小の拍手でこたえてゆく。

「今日、わたくしたちは日本からの親愛なる友、聖地巡礼途上のジャパン・クリスチャン・エキュメニカル・チームの方々、イタリヤ美術セミナリの日本人グループ、及び大学々生の方々を迎えたことを喜びといたします。皆々ますます対して篤い歓迎の意を表すると共に、皆々さまを通して皆々さまの祖国日本にご挨拶をお送りいたします。私は皆々さまに深く敬意を表し神の豊かな祝福を祈るものであります。」私たちはこの歓迎のお言葉に拍手してこたえた。教皇はこちらを向いて祝福の両手を高く上げられた。感激の一瞬であった。

私たちのチーム。それは東京の同信会伝道者藤尾英二郎師が中心となり、新日本トラブ社社の幹旋で組織した二名の団体。クリスチャン・チームではあるが藤尾団長の親交ある茶人の方々。藤尾(宗羊)師は夫人と共に裏千家流の、生き字引のように該博な知識をもつ指導的宗匠。明治初年まで皇室の茶

道であつた速水流の家元を、宗家の事情で一時預つていたという小西宗泉老宗匠。有楽流の七四歳の上田宗福有楽会々長はじめ、江戸千家流の方など八名。私も同志社在中堀貞一牧師夫人から手ほどきを受け、戦前家元今日庵で淡々斎大宗匠から手を取つて教へられ淡交会の末席を汚している。いわば茶人ティームというところ。教職は藤尾師と自給伝道の渡辺佐子雪師と私とだけでカトリック信徒三名を加えてキリスト者は半数あまり。しかし何れも教皇謁見と聖地巡礼を切望する群であることには間ちがない。

参拝団の中にはイタリーはじめ欧州各地からの学生が特に多く、その団体の名が呼び上げられると若者らは歓声をあげ勢いのいい拍手。まことに秩序のもとの一人大交歓の場であつた。

## パウロ六世のご来歴

パウロ六世。父弁護士ジョルジオ・モンテイニ。母ジウヂッタ・アルギジ。北伊ブレシア県コンチエシオ町に一八九七年九月二六日午後一〇時生れる。幼名ジョバン

ニ・バッチスタ・エンリコ・アントニオ・マリア・モンテイニ。

一九二〇年ミラノ神学校にて教会法博士の学位。同年五月二九日司祭。ロマのロンバルジア神学校、教皇立グレゴリオ大学、国立ロマ大学に学び、神学博士号をとる。一九三七年より五二年まで国務省勤務、一九五二より五四年まで駐仏大使。一九五四年ミラノ大司教。一九五八年一月一日樞機卿に任ぜられ、一九六三年六月二一日教皇に選ばれ、同六月三〇日戴冠式。

## 直接、一番最初におこたば

この教皇が聖壇を降りると聖壇への踏台は取去られる。ラテン語の讃歌の合唱、すばらしい訓練された韻律の美しさ。それがすむと教皇は最前列の私たちの所へ歩を進められる。私もティームの一人一人に堅い握手。両手で私の右手を包むようにして握手された時何かを私のたなごころへ押しつけて握らせ下さつた。皮袋入りの金のメダルであつた。誰にもわからぬように賜つたのである。これは後でわかつたのであるが我々教職

三人にだけ下さつたので、他の方々への配慮からこのような渡され方をなさつたのであらう。

ティーム一同に握手が終ると教皇は再びとつて返して私の真前に立たれ、専ら私の目を凝視しながら私どもへのお言葉を賜つた。こちらも何かご挨拶のことばを述べようとしても拙い英語はノドにつかえて言葉にならない。実は前以つてパチカン日本大使館の田辺事務官に何かご挨拶のことばをと教えを請うたのであつたが「法王さまと個人的にお話するようなことはまづないでしょうからそんな必要はありませんよ」とのことと安心し切つていたのが不覚であつた。

一九六二年一〇月、ヨハネ二三世によつて開会され、六三年パウロ六世に受継がれて六五年一月二八日閉会された第二バチカン公會議は前後四回、足かけ四年にわたりカトリック史上劃期的の意味をもつものであるが、そのねらいはカトリック教会が自らの姿勢を正し、現代世界に適應して、全人類の一致と世界の平和に貢献しようとする所にあつた。

「心を新たにすることによつて、造りかえられ何が神のみ旨であるか、何が善であつ



て、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」(ロマ書一二、二)

という聖句によるカトリックの一大革新の態勢を整えたのがこの第二バチカン公会議であった。この会議に於て教皇は、われわれプロテスタントに対して宗教改革以来カトリックがとつて来た敵視の態度は誤りであつたと率直に認め、カトリック以外のキリスト者、他宗教のもの、否無神論者とさえ對話の可能性を、四つの憲章、三つの宣言、九つの教会に於て強調しているのである。

## 日本のキリスト者への期待

この会議の召集者であつたパウロ六世が、今、私の前に立つて直接話しかけているのである。

「世界の平和と救のために、又教会一致のために、日本のクリスチャンの努力に大いなる期待をもっております。」

前に出した両手を動かし、じつと私を見つめながら真摯に話を進められる。そして最後に「どうかわたくしのためにも祈ってください

い。」

と結び再び握手して下さった。その温かい手、柔かい感触、指には教皇の指環が輝いていた。私は何か電撃にうたれたようなものを感じた。

かつて関学の曾木銀次郎教授、同志社の魚木忠一、有賀鉄太郎両教授から、カトリック教会に真の救はない。福音主義のプロテスタントにのみ救があると教理史、教会史の時間に教えられて来たものである。法王のために祈るなどということは逆立ちしてもあり得なかつたことであつた。中世に於ては教皇は歐洲の諸王を破門し、赦免を請う王を土下座させた權威の象徴であつた。その教皇座に座している方が「私のために祈って下さい」と申されたのである。法王さまも人であつた。弱い人なのである。すべての人間がもつ弱さ。しかし教皇のその弱さは、十字架にまでへりくだった主イエスの謙虚に通う崇高な弱さなのである。それをこの瞬間、かい間見た思いがして、私は世界の平和と救いのために立たれるこの方のために祈らねばならぬと固く心に期したのであつた。

## 涙にむせぶ富士山の裾模様

教皇は私どもの右隣りに席を占めている少年たちの群——それはイタリアの田舎の中学生らしかつた——に祝福をおくっていた。そして次々に各団体の前に立つてこのように祝福交歓し、やがて再び一二人の衛兵に昇かれてセドウラ上の人となり、全員の拍手歓送のうちに退去してゆかれた。

一同はここではじめてわれにかへつた。ふと見ると喜寿の折にしつらえたという富士の靈峯を自ら描いた裾模様の式服を美しく着て最前列に立つていた八〇歳の小西宗泉宗匠が両手でハンカチーフを目にあてがっている。押えても押えても湧いてくる感激の涙にくれておられるのである。それを見たとき、私も誘われて胸の奥からこみ上げてくる涙をとどめることが出来なかつた。この方は仏教徒。しかしこの場面はすでに教派も教理も超えていた。

## 二人の同志社人

回想、聖壇に手をおいて祈った。

### 大使館のレセプション

五年前に閉会した第二バチカン公会議は、その大聖堂で開かれたのであった。その時私どもの席の丁度反対側、つまり正面に向って右側の奥の方にカトリック以外のオブザーバーの席が設けられた。不思議な摂理は、かつてカトリックに救はないと私に教えて下さった有賀鉄太郎先生も一九六五年秋の最後の会議にこの席につかれたのである。そして一九六三年と一九六四年の二回の会議に土居真俊教授がオブザーバーとして出席せられた。土居教授は大阪商船、芦屋組合キリスト教会、関学、同志社と、私のあとから共に同じ道を辿って今日に至った方である。この世紀的大会議に、全日本のプロテスタントを代表して二人とも同志社人が使命を果されたということは喜びにたえない次第である。

その午後私たちは市内の史蹟を巡回、特に聖パウロがネロの迫害で首をはねられて殉教、その遺体が埋葬されている所を聖壇として建てられている聖パウロ大聖堂を訪れた。現在の建物は一九世紀に起工、二〇世紀初めに完成されたもので、聖ペテロ大聖堂とは反対に参詣者も少くヒソソリとしていた。パウロの獄中書翰はこのロマで書かれた事情など

一八日の夜はすばらしい一夜であった。小雨の降る中をバチカン大使公館にタクシーを走らせた。服部比治大使ご夫妻の歓迎レセプション。既にアノージュ神父さまや大使ご夫妻、田辺健事務官その他関係の方々が揃っていた。碧玉を溶かしたような、公害のない美しい地中海でとれた大鯛のいけずくり、たこやいなりずし、のりまき、大鉢一杯の酢のもの、餡だきの豆、うにや日本流の漬物、おしるこその他、長方形の卓一杯の山海の純日本料理。東京の一流料亭も及ばぬ美事なおふるまい。パリの日本料理店「たから」では塩月弥栄子さんに遭ったりしたが、日本を離れて二週間にもならないのに日本養への郷愁は切々。一同は心ゆくまで満喫した。何とこれは大使の栄子夫人がお手伝いさんを相手の手ずくりときいて二度びっくり。

席をあらためて一同は夫々自己紹介を兼ねたスピーチ。私どもが宗教団体ということで大使は接待を兼ねたロマ在留のゲスト安斉伸上

智大学教授を紹介して下さった。第二バチカン公会議の趣旨に従ってカトリック教会では信徒評議会という新機関を三年前に設定、世界各地から一五人の委員が任命され、東洋からはセイロンのルパシング氏と日本の安斉氏の二名。会長はカナダのロイス枢機卿。評議員の会議は毎年春秋二回バチカンに開かれるのでこのために来ておられるのであった。

安斉教授が第二バチカン公会議によるカトリックの新しい行き方を話くださったあと服部大使はご自分の信仰遍歴を語って下さった。高校時代は禅に傾倒したが終戦の時、禅に疑問を感じ、米国の寛大な占領政策に心をうたれた。当時終戦連絡事務局に働いていたが、米国のこの態度は結局キリストの愛の精神から来るものであると感銘、禅は自分の修行だけで社会性がない。他への愛がない。そこで近くのスエデンボルグの信仰に立つ新教会で洗礼をうけ、夫人も横浜の教会で受洗しておられるとのこと。大使はその後任地の先で、ハワイではゴールドスミスの信仰、印度ではインド教や仏教、イスラエル大使時代はユダヤ教など研究、ナイジェリヤ、ビアフラの三年の後、去る二月二六日親任状をパウ

ロ六世に奉呈して現職につかれたという。そして実に私たちは大使ご夫妻がご赴任最初のレセプション第一号にあずかる光栄をになったのである。

ご夫妻でチームに参加された上智大学ザビエル育英会理事の田代穰先生は、教皇謁見の光栄をカトリック信徒として語られたが、同行のプロテスタントの方々が涙を流して喜んで下さったことは一入の感銘であり、これはパウロ六世がバチカン公会議でプロテスタント敵視を悔改められた実証のあらわれであると感想を語られた。

### 原田健先生のこと

出発準備中に私は同志社校友会東京支部長原田健先生に、教皇謁見の便宜をお願いした。原田先生は宮内庁式部官長の前はバチカン大使であられ、当時ともに働いた田辺事務官をご紹介、お手配くださった。満ち足りた思いで宿舍サヴォイホテルに帰った時、大使館のこのようなお取扱いとご接待は先生のおかげですと私は皆からお礼を言われた。謁見の折のバチカン当局の特別のご配慮と共

に、これは実に先輩の原田元大使の余光の然らしむところであり、又後任の服部大使が先任者につくす美しい仁義が然らしめたものと敬服にたえなかった。

### 洛南光栄の日

帰国後、私は一同の感謝を代表して東京飯田橋近くのマンションに閑居しておられる原田先生のお宅にお礼に参上した。窓際の棚には皇室のお写真やパウロ六世を訪問した折の写真などが現職時代の光栄をしのばせていた。

ここで私は不思議なみやげをいただいた。それは三枚の私の三十余年前の古びた写真であった。私の京都馴染の東寺五重塔畔細民街伝道の折、先生のご両親、原田助先生に呈したものであった。

「今、父の日記や書きのこしたものと遺稿集を出版しよう」と原稿に書いているのですが、その書類の中にこれがありましたから——」

とのこと。その一枚は昭和一二年八月、北支事変突発直後、北支に飛んだ折、朝日の記者

が天津の司令部で撮ってくれた香月清司令官と私の写真のエハガキ、その裏面には

「金参円、中国難民救済のためご芳志感謝申上げ、本夜朝鮮人のためクリスマス執行仕り、募金額六千円の所現在八百円突破、

原田助先生咲様

洛南基督教団内 中国難民救済施療班組織

本部 志村……」

と一二年一二月末の日付の献金受領の礼がしるしてあった。

次の一枚は京都九条第二小学校講堂に満堂場外にあふれる二千名以上の会衆を集めて賀川豊彦先生が「精神修養と宗教生活」の題下にご講演の光景、昭和一〇年頃のもの。もう一枚は東寺付近の木賃宿にいらっしゃるお遍路さんや乞食さんたちを集めて、奈良電（今の近鉄）東寺駅南東角にあった工科学校の講堂を借用して催おしたクリスマスの記念写真。

メリー・クリスマス、一九三四

地にては旅人 まだ寓れるもの

主にありて富める

天地所有の群

ああ 洛南

地上 光栄の日

などと二本の十字架を下部に配してしるされ大形の紙が前面に張られ、前出の土居真俊教授や、若く惜しまれて世を去った同大神学部の小田助教の学生時代の姿本年七月、七七歳で召天された四貫島教会の聖女を仰がれた黒瀬艶子女史など尊いご奉仕の姿もまじっている。これらの写真は昭和一九年一月中旬支漢口教会牧師館が被爆炎上。一切を失って私の手元には一枚もなかったものであり、思わぬ所で若き日の追憶を新にすることが出来て嬉しかった。

元同志社総長であられた原田助先生ご夫妻の几帳面なご生活の片鱗をここにおしのびし、慈愛あふれるおまなざしを懐しく胸に泛べて感慨を新にすることを得た。

### み岩の前

私どもの旅は本年三月五日スイス航空便で羽田発、カイロ、アムステルダム、ロンドン、パリ、ジュネーブ、マドリッド、ニス、モナコ、ロマ、ナポリ、ポンペイ、ベニス、ミラノ、ミュンヘンと進み、戦争中のイスラエルに滞在六日、三月二七日の金曜日、

ご受難週の聖十字架の記念日にはヴィア・ドロサの道を多くの巡礼者と共に行進した。アテネ、コリントにも赴き、標識さえもないケンクレアの海辺、パウロが請願のこと故に髪を剃ったというあとをさがしあてることが出来た。ボンベイ、バンコク、香港、台北を経て予定の通り四月四日夜帰朝。

エルサレム入りしたのは三月二六日のゲツセマネ祈禱の夕。ダマスコ門外のホテル、ナショナル・パレス。この深夜私は独り宿を出てはじめての馴れない道を辿り、ケデロンの谷を下ってオリブ山麓の、主が血の汗を流して祈られたというゲツセマネへ行った。主が座して祈った岩を中心に、その上にカトリックの教会が建てられており、フランシスカンが堂守をしていた。主の座したもうた岩の前に進み、私は祈った。そして次のようにそこでノートにメモした。

### み岩の前

主はこの岩の上に  
主はこの岩の上に  
坐して祈りましぬ

ああ 祈りましぬ  
み岩の前 坐して  
もう手のべ 岩にふれぬ  
冷え冷えと つめたき岩  
二千年へたれど  
変らぬ岩

主 今 在したもうごと  
主の み声 きこゆ  
血の み汗 したたらせ  
主 祈らせたもう  
我なく 世なく  
ただ 主 在したもう  
主よ

一九七〇、三、二七、暁闇  
ゲツセマネにて 仰架子

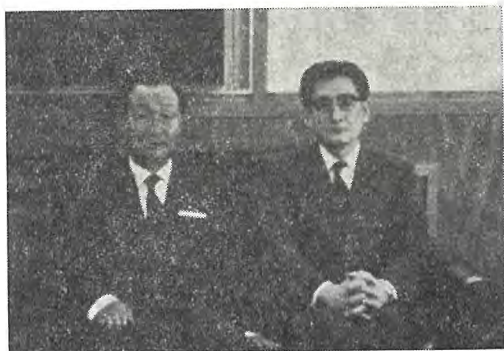
○ この度の聖地巡礼の旅のピークは、実に教皇パウロ六世に謁見を賜わったことと、このゲツセマネの暁闇の感激であった。

（昭和六、専神、昭九大文神卒  
日本キリスト教団 元標教会牧師）



# 韓国の学生、同志社の先輩たち

中 條 毅



前副総理 朴忠勲氏と筆者  
(旧制 同志社高商 昭14年卒)

青い日本海を僅か二十分眼下に眺めていると真黄色い洛東江がうねりにうねって半島の丘の間を大きく流れていた。

金浦空港近くには迷彩を施した軍用機とカマボコ兵舎が並んで、海峡を隔てた隣りの国が、日本の大平ムードとはがらりと異なっており、戦時的体制下にあることを感覚で知らされる。

大学にも会社にも労働組合にも街にも日本と比べれば軍事色が入っていて日本の過ぎし戦時下を思い出した。アジアの国々は何処を廻っても軍事色が強い。皮肉なもので、日本が戦争に勝っておれば、今頃、アジアでやっているだろうことをアメリカが出てきてやってくれている。負けた御陰で日本は元禄大平

の世をむさぼっているということになる。

韓国には二二三校（一九六八年）の大学があり、学生総数は十七万人といえは早慶と同志社と日大の総数ぐらいかも知れぬ。という一校の学生数が少なくて、羨しい限りだが事実、キャンパスなどアメリカ式で、日本の大学に比してはるかにスケールが大きく校舎も立派でビジョンがある。第一、日本の大学のように乱雑でなく、静かである。しかしキャンパスでは軍人がきて教練を指導し、士官服を着た学生などもみられ、長髪族は一人もみなかった。女子はミニであるがマキシーストリートでも一人もみなかった。学生の読む書物の傾向をみようと思つて大学の前の本屋を探したが、殆んど一軒もみられず、学生の話では「本は余り読みません」ときた。「教授は一般的に学生からは尊敬されていませんよ」ともいうので、それなら「どんな職業が尊敬されるのか」ときいたらニヒリスティックに笑つて答えなかった。右の事情は日本とよく似た点もあるが違っているのはマル系の書物が全く学生の手に入らないことで、民族主義、学生運動のメッカであり、発火点である高麗大学校でさえ、マル系文献は鉄格子の図書館の

奥に存置され、学生の閲覧は禁止されていた。ところが大学院などはアメリカ式で一度、会社に入って再入学するのが多く、たとえば延世大学の崔教授の教室には現役士官、会社重役、労組役員なども受講にくるとのことだった。

年輩の教授たちの多くは日本の大学を卒業した人たちで、高麗大学は早稲田にスクールカラーが似ていると言い、延世大学はキリスト教主義で慶応とか同志社型でしようとも説明する人があった。学生が一般的に本を読まないというのが事実とすれば、それは次のような生活環境からも由来しているだろう。大抵、大学二年で兵隊に行き、三年間の軍隊生活を送ってきたから大学に戻ってくる。だから卒業は早くて、二五・六歳、大学入学までの予備校生活をした者が非常に多いから大抵、二七歳前後になるという。

年もっているし軍隊ボケもするだろうし、自治会などの委員も退役士官が多いというくらいだから、この点などは日本の学生と活と根本的に異なったところであり、「学徒出陣」で曾て校庭から放り出されたことのある小生などにとってはこの差異はわかりすぎ



釜山大学校長尹炳麒氏と学生

る位、わかるのであるが、日本の今の学生諸君には、ほんとうには自分たちの有難さは、わからないであろう。

私が釜山に行った六月十六日、釜山と下関の間にフェリーが初めて開通した。釜関フェリー株式会社副社長、王相殷君は岸信介氏な

ど日本からのフェリー乗客の接待代表として忙殺されていたが私は韓国の民衆がどういう表情で開通第一船の日本客をむかえるかに関心があった。波止場には学生のデモも野次もなかった。大群衆は静かに無表情に期待と不安をよせて、この船を迎えているようであった。その時、小学生の行列が韓国国旗を手にしてやってきたがこの行列は船の横を通り過ぎて、今一つ南のピアに向った。そのピアにはヴェトナムに向うであろう輸送船があった。婦人会らしき団体もそちらへ行った。波止場を吹きぬけてくる風の中で私は日本の戦時の「出征兵士を送る歌」をおもい起した。そして、事実そんなメロディーが釜山の港に流れていた。日本に帰って、教室でこの話をしたら学生は特別に何の関心も示さなかった。その後下鴨の婦人会で話をしたら年配の御婦人の集りであっただけに溜息やら質問やらが出た。体験からくる彼我の比較ができるのは年輩の連中だけであり、ここにも断絶の一つの例証があった。韓国では過去を「日帝時代」「日政時代」と呼んで日本統治時代を学生はとくに強烈に批判はするが、中年以上は言葉の上からも生活の上からも通ずるも





協成海運社長王相殷氏と釜山商工会議所で  
(旧制 同志社高商 S16年12月卒)

のが多かった。歩いてきた外国の中で最も懐かしさ、親しみを感じたのもこの国の人たちであつた。

そして、学生、教授、経営者、官僚、労働組合の幹部などお会いしたすべての人たちが暖かく心から歓迎を下さつた。

毎日新聞の滝沢記者が書いている。「ソウル、金浦空港の滑走路を東京行きジェット機に向かって歩きながら韓国を離れることがさ

びしかった。仲良くなった人たちの顔が次々に浮かんだ。タラップの途中でふり返ると、もう一度、あすへ向かつて走る韓国に力いっぱい声援の手を振つた」と。大韓航空に乗つて、釜山の港を見下した時の私の気持は、それこそ同じようなものであつた。

この上もなく鄭重なもてなしをして下さつた大韓毛紡の鄭世彬副社長、労働関係の官庁の方々、韓国労働組合総聯盟の事務総長、韓基洙氏などその他御指導御世話になった人はい多いが、その中でも今回、お会いすることができた同志社出身の方々の消息をお伝えしたいと思います。

朴忠勲氏は韓国商工部長官、副総理を昨年、辞任し、目下、韓国産業開発研究所・会長、経済科学審議会、常任委員として産業経済開発の要職にあり、朴大統領のブレイン。

日本との関係会議には東京―ソウル間をよく往復したが、京都には遂に立寄れなかつたとのこと、私の三年先輩でもあるので岩倉の野暮な学生々活の話などが出た。

王相殷氏は協成海運株式会社代表理事、釜山市観光協会々長、釜山商工会議所副会長、

釜関フェリー株式会社副社長として人口一七〇万の港、釜山の経済・海運界の代表者である。学生時代から英語ができたのでロイド・エージェンシーの名誉領事などもやつてゐる。

尹柄驥教授は国立、釜山大学校（法政）大学長であり、日帝時代は毎日新聞記者、恒藤武二、滝川春雄教授と同級とのこと。釜山大学の学生自治会の連中は強引に私をベンチに座らせて写真をとつた。

ソール女子大学の学長であり、同校の創立者、高鳳京女史（法学部昭八年卒）にも御会いして、歓談の機会をもつことができたが梨花女子大学長、政府の保健局長などをおやりになった女傑であり、同志社同窓会の会長。

高学長のお話では建国大学総長文熙奭氏その他、南にも北にも同志社の有力な先輩が活躍しておられるとのことであつた。高先生の御骨折で同志社同窓会の方々が集まつて下さるとの有難いことであつたが、労働調査プログラムやらバンムンジヤム行で日程がとれず御厚意に添えなかつたことをこの紙面を借りて深くお詫び申上ます。

（文学部教授・人文科学研究所長）